

大学教育の国際化

—EMI 科目開講の充実とグローバル FD の取組の展開—

池田佳子（関西大学国際部）

ベラルガオリバー（関西大学教育開発支援センター）

キーワード 大学教育の国際化 EMI カリキュラム グローバル FD／

1. はじめに

関西大学では、他大学の進展同様、英語で開講する科目(EMI 科目/ English as a Mediated Instruction) の拡充を 2014 年以降急ピッチで進めてきた。2014 年度に 6 つのモジュール(テーマ別英語開講専門科目) と語学スキルアップや異文化コミュニケーション能力の基礎の養成を主目的とする Global Liberal Art Unit からなる KUGF(Kansai University Global Frontier)カリキュラムが新設され、3 年目を迎える平成 28 年度には、新たに「グローバル 科目群」として全学部共通教養科目に位置づけると共に、2 つの新モジュール(Applied Sciences and Engineering「応用科学と工学」と Fundamentals of Social Sciences「社会科学の基礎」)を加え、よりカリキュラムとしての科目数と専門分野の範囲を広げる展開となった。2017 年にも Comparative Linguistics という言語学関連の科目を先述の「社会科学の基礎」モジュールに追加した。2018 年度には、モジュール 1 を Engineering Approach to Urban Issues として更新し、4 つの科目を本学の理工学部の特任の教員が担当する。徐々にではあるが、KUGF カリキュラムの充実を図っている。また、同 2018 年度には、大学院共通(オープン)科目群の設置が実現する。「日本学を学ぶ」、大学院外国人留学生対象の「日本語アカデミックライティング」科目など、英語で履修を希望する本学の院生のニーズに合わせたカリキュラムを提供する。これらの多くが EMI 科目であり、

今後も英語基準の学位プログラム等の確立につながるだろう。

関西大学のこのような動きは、高等教育機関の国際教育の展開の経緯のスケールを尺度にした場合、大変「後発」であることは、以前にも言及した通りである。世界の主要大学にとって、国際化は戦略的な重要課題である。国内の大学においても、その潮流に乗り遅れることなく、国際的人材の登用や質の高い研究活動を推進することが求められる。その背景にある要因の一つは、やはり大学の世界ランキングである。主要な世界大学ランキングはいくつかあるが、最も著名なのが、英タイムズ・ハイヤー・エデュケーション(以下 THE)社によるランキングである。THE の総合ランキングは、さまざまな基準によって判断されるが、教育力(アンケートによる評判、教員あたりの博士学位授与数など)、研究力(アンケートによる評判、研究者 1 人あたりの研究費収入・論文数など)、研究の影響力(論文の国内外における引用数)、国際性(海外留学生や外国籍教員数の割合、国際共著論文の数)、産業界からの収入(研究者 1 人あたりの産業界からの研究費収入)といった 5 領域・13 項目で算出される(<https://japanuniversityrankings.jp/>)。

この動きの最先端として、日本を含むアジア諸国においても、「教授言語としての英語(EMI)」を使用した授業の増加とその質の向上が積極的に推し進められている。池田(2017)でも言及しているが、本学のような EMI カリキュラムの動きは、他よりも後発であるからこ

そ、先発の事例から学びよい良い取組として構築することができるという利もある。筆者らは、この利点を最大限に活用し、国際教育の展開の波を捕らえ、本学にしかできない特色のある国際教育の在り方を見出していきたいと考えている。

2. 国外のEMI事情—PART 2—

池田(2017)では、マレーシアやオランダといった、その地域の一般的なコミュニティにおいても比較的主要な言語媒体として英語が使用されている国々におけるEMI事情について論じた。本稿では、共通言語として英語が一般的ではない中、EMIカリキュラムを高等教育機関で設置し運営している国のEMI事情をすこし考察してみたい。例えば、欧州圏では東欧諸国(例:チェコ、ポーランド)、ドイツ、スペイン、フランスなどにおけるEMIカリキュラムがそれに該当する。東アジア・東南アジアでもこのような事例は多く存在する。近々の東アジアの韓国や中国、そして台湾でも、EMI科目をどのように推進していくかという問題は、国際教育関係者の大きなミッションとなっている。2007年に、韓国の文部科学省に相当するKAIST(Korea Advanced Institute of Science and Technology 韓国科学技術院)が、すべての大学初年次の教育を英語で行うといった指針を打ち出した。2010年には Pohang University of Science and Technology (POSTECH/浦項工科大学校)が約93%の提供科目を英語で行うまでになった。Piller & Cho(2013)によると、この頃までに上位ランキングに上がる韓国の大学の3割がEMIを導入したとされる。QSやTHEといった世界ランキングを意識する傾向は日本のそれよりも韓国は先取りしており、これらの急激な英語化への動きはランキングの向上を明示的に意図したものとなっているようである。事実これが功を奏し、本学の協定大学でもある漢陽大学や

嶺南大学校は、過去ほんの数年の間にランキング(例えばQSランキングやTHEアジアランキング)を一気上昇させた。その認知度を活用し、海外からの多くの留学生の取り込みに成功している。東南アジアでは、池田(2017)で言及したマレーシアの他に、タイ王国におけるEMI科目の導入の勢いも目覚ましい。韓国のように、国を挙げての高等教育の国際化の推進が進んでおり、2010年の時点で、タイ全体において981プログラムの外国語で教授するプログラム(IP/International Program)が実施されており、そのほとんどが英語である。IPは教育水準が国際的であることが指針とされており、EMIカリキュラムの質も、教授陣の教育背景も非常に高く多国籍に及ぶ。東南アジアの教育ハブの実現を目指し、国際的な水準の教育の質を確保することで、国外からの人材を誘致し、国家の経済発展に貢献するというのがストーリーである。2008年から2022年まで有効の「第二次15カ年長期高等教育計画フレームワーク」の指針に基づき、タイは本格的に留学生送り出し重点国から、受入れ重点国への転換を図ろうと動いている(鈴木2016)。

3. EMIと伴走する教員支援「グローバル・ファカルティ・デベロップメント(Global FD)」

Internationalization of Curriculum(カリキュラムの国際化)は、単に教育の言語媒体をたとえば日本語から英語に転換するだけで解決するものではない。Global Teacher Educationのある記事では、カリキュラムの国際化、はその教育を担う者(faculty)の視点、価値観、そして彼ら自身のグローバルコンピテンシーの転換を行うことであると述べている。関西大学が目指す国際化されたカリキュラムは、Whalley(1997, 2000)等でも同様の定義があるように、国内の学生および国際学生らがインターカルチャル、マルチカルチャルな場面において主体的に行動できる(関西大学の場

合「考え」、「行動する」、「考動できる」として表現される事が多い)人材の養成を可能にする教育である。この人材養成を遂行する上で、最も学生に影響を与え、国際化されたカリキュラムの本来の目的を具現化させることができるのは、教育者自身に他ならない(Bond, 2003)。

EMI 科目設置の試みは、それだけではあくまでも「外枠」であり、環境づくりの一部以上のものにはならない。これらの新設された科目の中で、日々学生と接し、「国際化された授業」、「国際化された教室」を作り出すのは、その中でどのような教授がなされるのかにかかっている。平たく言えば、大学教育の国際化は、教育者自身の国際化と、彼らを与える学生達への影響力が大きな鍵を握っているということである。EMI を推進する上で、看過できないのが、その推進を担う人材リソースである。教員・職員、そして多様なアウトリソースとの協業などの多側面における議論がここでは可能だが、先述した国際化されたカリキュラムの重要な担い手であり、成功の鍵を握る教育者(faculty)のプロフェッショナル・ディベロップメント(PD)及びファカルティ・ディベロップメント(FD)が重要となる。

英・米・豪国では、自国の大学において急激に増加する留学生・移民学生層への対策として多様性クラスでの教授のためのFD(faculty development)研修を行う機関も少なくない(例：オックスフォード大学・英/クィーンズランド大学・豪)。EMI カリキュラムを推進する中国・韓国・台湾・タイといった東(南)アジア諸国の大学機関では、教員が現地でこれらの教師養成研修に参加したり、「オンサイト研修」として自国へ研修担当講師を招へいし複数多数の地元教員が参加したりといった教員養成活動が盛んである(中井 2009 等)。東(南)アジアの事例に加え、スウェーデン・デンマーク・オランダ等の(北)欧諸国でもEMI が成功している事例が多々存在する

(Wilkinson2013, Dearden2014)。

5.1 関西大学で推進するグローバル FD (2015-2017年度)

関西大学で実施してきたグローバル FD 活動は、2015 年を皮切りに開始された。EMI 科目を本格的に拡充させた2014年の翌年である。EMI のエントリーレベルのトレーニングとして、「CLIL から学ぶ英語を介した教授法トレーニング」をテーマに、平成 26 年度における国際教育のための FD/PD の第一弾を企画し、7月末の5日間(7月20日~25日)の集中トレーニングワークショップを開催した。このワークショップは、CLIL(クリル/Content Language Integrated Learning 内容言語統合学習)と言う、専門科目教科を語学教育の方法により学ぶ教授法を実体験しながら理解していく教授法を理解し、実際の授業活動に取り込む方法を学ぶというものである。クィーンズランド大学所属のICTE(Institute of Continuing & TESOL Education)から講師を特別に招聘し、今回のワークショップが行われた。この研修については前稿池田(2016)で既に報告した通りである。

2016年には、「国際教育支援室」(教育推進部の機関の一部として位置づけ)が新設され、ここに所属する特別任用教員(2名の准教授と1名の助教：当時)らが主体となり、これらの学内ワークショップを実施している。CLILの教授法を一部紹介し、主にイギリスの高等教育機関(例：オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、リード大学)のEMI研修プログラムなどを参考に、日本の大学の状況に合わせた課題を対象としたワークショップ内容をデザインした。外部の提供するプログラムでは対応しきれない、参加した関西大学所属教員らの声をできるだけ反映させた内容となっている。図2は、2016年7月9日に開催したワークショップの会場の様子が感じられる写真である。本学におけるEMI科目は、本学在籍の日本人学

生に加えて、多様な国からやって来た留学生が混在する。留学生の多くが、本学が現在約 150 ある世界中の協定大学から半年から 1 年の間交換留学生として本学で学ぶ学部生たちである。欧米諸国出身の学生もいれば、英語を第二（または第三）外国語として駆使する東アジア・東南アジア・アフリカの学生達もいる。彼らは「非正規」学生として本学では位置づけられており、短期間の日本滞在で会得したいことはそれぞれである。かたや日本人学生は、一定の外部英語テストの要件をクリアしていることが前提とされているが、実際のコミュニケーション上での英語の運用スキルや、アカデミックな設定における英語使用についてはこれからという発展途上の能力レベルである学生も多くいる。このような国籍も語学力もまさに混合したクラスを、どのように教えることで効果的な情報伝達、活発な学習を促すことができるのか。これらの科目を主体的に担当する特別任用教員（それぞれアメリカ、フィリピン、アイルランド出身）達も日々試行錯誤しながらクラスマネジメントを行っている。理想的なカリキュラム像を描けば、習熟度別に履修者を分けて複数科目開講をした方がより教員は学生のニーズにあわせて教授ができることは承知しているが、さまざまな制限や環境の中、それがすべての科目についてかなわない。必然的に、語学力の差、文化の差といった様々な要因を乗り越えなければ、日本の大学における EMI の意義は薄れてしまうことになる。この大変現実的であるが重要な問題解決をテーマとし、FD では 2 部構成をとり、第 1 部では 3 名の特任教員による CLIL（内容言語統一学習）メソッド等を応用した授業の紹介を行った。学生の理解の段階に合わせた段階別タスクの構築の仕方、使うことで学生が講義をより容易に理解できる英語表現、そして語学能力の差を活用したペアワークなど、様々な授業実践のヒントが参加者らに紹介された。



図 2 2016 年度グローバル FD の様子

EMI を担当する、もしくは担当を将来的に考えている教員にとって、これらのクラスマネジメントと同じ様に関心が高かったのは、EMI 科目を教授するに「相応しい」語学力レベルがなんであるか、という点であった。ヨーロッパ言語参照枠(CEFR)で C1 を下限とするといったスペインの高等教育機関における明確な提示があるようなケースもあるようだが、本学の FD では、あえて外部試験スコアなどによる参照ラインを設定するのではなく、「どのような授業を展開する EMI」であるのかという、授業デザインの目標を描き、その授業を実現するために必要な can-do（実践能力）を個々で洗い出すという作業を推奨している。EMI でも、CLIL 同様に、受講者の言語の志向に寄り添った授業展開をすることが提唱されており（Dearden 2014）、受講者の多くが日本語の語彙リストやパワーポイントスライドの一部に日本語訳を提示するといった工夫を加えることで、英語で展開する講義や指導（インストラクション）の理解を促進することができるようになるのであれば、講師と受講者の判断と合意によって実行してもよいとされている。EMI 科目に対する一般的な理解では、このような柔

軟性があることが認識されていないことが多いのではないだろうか。このような正しい理解の波及を図る上でも、2016年度に行ったグローバルFDは有益であったと考えている。

2017年度からは、オンサイトFD、つまりキャンパス内で頻繁に実施する研修の機会をより多くの教員に届けることを趣旨とし、毎月1回のペースで、特別任用教員（共著者ベラルガがその一人である）を配置し、本学の非常勤講師1名および大阪大学にて応用言語学を研究する博士課程後期の大学院生数名にもアシスタントとして参加してもらい、教員対象のグローバルFD活動を実施している。

Office of International Education Support
Division of International Affairs

Global FD Series: English Skill Up Sessions 2018

Are we ready for global competitiveness? Take the first step. JOIN US!!!
We are holding training sessions as part of our ongoing efforts to offer classes in English (English Mediated Instruction) and expand our Global Faculty Development Series.
Please sign up and get ready for some great pieces of training ahead in 2018!

Topics & Schedule:

1. Professors as Students: Practical Brush Up English Exercises
Professors, like students, must use English to better improve their communication in a global environment. Take this interactive workshop as we discuss social issues in English and bring this exercise to your classes. Brush-up your English in the academic discussion!

| Date | Day | Time |
|----------|-----------|-----------------------|
| April 10 | Tuesday | 4:30 p.m. - 5:45 p.m. |
| April 11 | Wednesday | 4:30 p.m. - 5:45 p.m. |
| April 12 | Thursday | 4:30 p.m. - 5:45 p.m. |

*All three sessions are conducted with the same topic.

2. Effective Contextual Teaching Workshops: Kansai University Experiences
Professors will share their teaching experiences using English at Kansai University. Hands-on workshops available to let you see the strengths and the weaknesses of the methods. Know what we have at home!

| Date | Day | Time |
|--------|-----------|-----------------------|
| May 15 | Tuesday | 4:30 p.m. - 5:45 p.m. |
| May 25 | Friday | 4:30 p.m. - 5:45 p.m. |
| May 30 | Wednesday | 4:30 p.m. - 5:45 p.m. |

*All three sessions are conducted with the same topic.




図3 2017年度グローバルFDのフライヤー

少人数のグループで行うFDであるため、それぞれの教員の悩みや不安材料をテーマにじっくりと相談できる機会を生み出しており、2018年度においても、今後増員予定である新任の特任2名も加わって、より多くの本学の教員がこの機会を活用できるよう継続する予定である。2017年12月3日には、特任教員による通常のグローバルFDに加え、12月初旬に開催された第3回の国際教育シンポジウムの3日目のイベントとして、ブリティッシュ・

カウンシルに協力を仰ぎ、丸1日をかけてEMI担当者のための研修を行った。この機会には、国際教育シンポジウムに参加した台湾や日本の学外の教員も参加した「混合グループ」にてEMI科目担当者のための研修を行うことができた。

4. 今後の展開

2014年に始まったKUGFカリキュラムを契機とし、焦点を少しずつ変化させ、どのようなニーズが学内にあるのかを同定しながら試みたグローバルFDも、今後4年目に突入し、第二のフェーズを迎えようとしている。グローバルFDを今後さらに推進する上で、改めて現在（いま）、関西大学の教育の国際化戦略の中で、EMI科目を本学でどのように活用したいのか、位置づけを把握する必要があるだろう。EMI科目の活かし方は、一つではない。

EMIを日本の一大学で実施すると、さまざまな「障害」にぶち当たる。例えば、英語を母語としない日本人学生が留学生と科目をともに履修するケースが多いが、この場合、日本人学生たちはTOEFLなどのテストスコア以外にも、ディスカッション能力や、批判的思考能力など、「アカデミック・コミュニケーションスキル」を第二言語で駆使するという高次のパフォーマンスを要求されるため、多くの学生が途中で挫折するか、芳しくない成績で学期を終えてしまうことがある。学生の英語力そのものが追い付かず、共修する留学生たちから不満の声があがることもある。学生と教員間のコミュニケーションの難しさも、文化の異なり、「学び」の価値観の異なりなど、さまざまな現場の混乱が生じる（Chen, 2010; 小島 2016）。留学生だけにこれらの英語開講科目を提供するのも一つのオプションではあるが、本学が、そして日本全体がそもそも国際化したいのは、すでに日本という外国へ一歩踏み込む勇気と国際性を持つ留学生達だけではなく、むしろ世界

へと目を向ける視点を未だ持っていない(ことが多い)日本人学生ではないのだろうか。それならば、日本人学生達が留学生達と参加し互いの文化が混合する環境にて科目開講をする道を選ぶべきだろう。EMIカリキュラムを維持し、今後の留学生の受け入れ拡充や日本人学生の国際的照準レベルへの伸長を結果として導くには、これらの混乱のもととなる要因の解決も、間接的には教員支援の一環となる。2015年にキャンパス内に設けた学生のための語学活動支援の活動(「Mi-Room」)は、正課外活動としての学習が可能な環境であるが、これがその間接的支援の一つに相当する。Mi-Roomは、2017年度に至るまでに、学生の間で口コミで広がり、延べ約1000人の利用者をかかえるスペースとして成長を遂げた(Mi-Room参加者総数2016年度延べ総数2352名、2017年度延べ総数6677名)。しかし、未だこの活動空間は正課の学習と強いリンクを持っておらず、教員間でその存在を認識してはいるものの、自身の担当する授業とのかかわり方を考えるといったアクションには至っていない。国外の大学では、正課外の学習を正課に紐づけるco-curricularという位置づけで、単位取得に正課外の活動が密接にリンクづけられている。Mi-Roomが目指すのは、このようなリンクであり、

EMI科目の担当者や将来的な担当者の支援を行うことも、カリキュラムの質を向上し維持していく上で大変重要な役割を担う。これらの試みは、参加する教員が積極的に行動しなければよい成果を期待することはできない。気軽に、そして多忙な教員達のスケジュールの合間にも参加できる便宜性の向上を意識し、かつそれぞれのニーズに慎重に耳を傾けながら、今後もグローバル教育の推進につながるFD/PDを展開していきたいと考えている。

参考文献

- 北村友人・杉村美紀(2016). 『激動するアジアの大学改革』上智大学出版.
- Pillar, L. & Cho, J. (2013). Neoliberalism as language policy. *Language in Society*, 42(1):23-44.
- 池田佳子(2017). 「国内外の大学教育カリキュラムの国際化の流れを考えるー留学の短期化・英言語媒体科目(EMI)を志向する国際教育ー」『関西大学高等教育研究』第8号: 11-22.

注

本稿の研究調査の一部は科学研究費基盤C(一般) 研究番号15K02666(代表:池田佳子)および科学研究費挑戦研究(萌芽)番号17K18630(代表:バイサウスドン)の助成をもとに行われた。

池田佳子(関西大学国際部)
ベラルガオリバー(関西大学教育開発支援センター)